

檸檬 (れもん)

梶井基次郎

新潮



檸檬

様

定価 240 円

新潮文庫 草 96 A

昭和四十二年十二月十日 発行
昭和五十四年四月三十日 二十二刷

著 者 梶 井 基 次 郎

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛と送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

⊗ 印刷・大日本印刷株式会社 製本・憲專堂製本株式会社

© Ken'ichi Kajii 1967 Printed in Japan

檸 (れもん) 檬

梶井基次郎 著

新 潮 社 版

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

檸檬	七
城のある町にて	一四
泥 濘	四六
路 上	五七
橡 の 花	六四
過 古	八〇
雪 後	八三
ある心の風景	九四
K の 昇 天	一〇六
冬 の 日	一一五

桜の樹の下には……………	一三四
器楽的幻覚……………	一三七
蒼　　穹……………	一四一
笈　　の　　話……………	一四五
冬　　の　　蠅……………	一四八
ある崖上の感情……………	一六三
愛　　　　撫……………	一八〇
闇　　の　　絵　　卷……………	一八五
交　　　　尾……………	一九一
のんきな患者……………	一九九

注　　三好行雄
解説　淀野隆三

檸

(れ
も
ん)

檬

檸檬

檸檬

檸檬

7

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧えつけていた。焦燥と云おうか、嫌悪と云おうか——酒を飲んだあとに宿酔があるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に相当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかった。結果した肺炎カタルや神経衰弱がいけないのではない。また脊を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がなくなつた。蓄音器を聴かせて貰いにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上つてしまいくなる。何か私を居堪らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けていた。

何故だかその頃私は見すばらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えてゐる。風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしても他所他所しい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転してあったりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであつた。雨や風が蝕んでやがて土に帰つてしまふ、と云つたような趣きのある街で、土塀が崩れていたり家並が傾きかかつていたり——勢いのいいのは植物だけで、時とするとき驚させるような向日葵があたりカンナが咲いていたりする。

時どき私はそんな路を歩きながら、不図、其処が京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台

とか長崎とか——そのような市へ今自分が来ているのだ——という錯覚を起そうと努める。私は、出来ることなら京都から逃出して誰一人知らないような市へ行つてしまいたかった。第一に安静。がらんとした旅館の一室。清浄な蒲団。匂いのいい蚊帳と糊のよくきいた浴衣。其処で一ヶ月程何も思わず横になりたい。希わくは此処が何時の間にかその市になつてゐるのだつたら。——錯覚がようやく成功しはじめると私はそれからそれへ想像の絵具を塗りつけてゆく。何のこととはない、私の錯覚と壊れかかった街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。

櫛

私はまたあの花火という奴が好きになつた。花火そのものは第二段として、あの安っぽい絵具で赤や紫や黄や青や、様ざまの縞模様を持った花火の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき。それから単花火というのは一つずつ輪になつていて箱に詰めてある。そんなものが変に私の心を唆つた。

樽

それからまた、びいどろという色硝子で鯛や花を打出してあるおはじきが好きになつたし、南京玉が好きになつた。またそれを嘗めて見るのが私にとって何ともいえない享樂だつたのだ。あのびいどろの味程幽かな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては父母に叱られたものだが、その幼時のあまい記憶が大きくなつて落魄れた私に蘇ってくる故だろうか、全くあの味には幽かな爽かな何となく詩美と云つたような味覚が漂つて来る。

察しはつくだろうが私にはまるで金がなかつた。とは云えそんなものを見て少しでも心の動きかけた時の私自身を慰める為には贅沢ということが必要であつた。二銭や三銭のもの——と云つて贅沢なもの。美しいもの——と云つて無気力な私の触角に寧ろ媚びて来るもの。——そう云つ

たものが自然私を慰めるのだ。

生活がまだ蝕まれていなかった以前私の好きであった所は、例えば丸善であった。赤や黄のオードロンやオードキニン。洒落た切子細工や典雅なロココ趣味の浮模様を持った琥珀色や翡翠色の香水壺。煙管、小刀、石鹼、煙草。私はそんなものを見るのに小一時間も費すことがあった。そして結局一等いい鉛筆を一本買う位の贅沢をするのだった。然し此処ももうその頃の私にとっては重くするしい場所にすぎなかった。書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取の亡霊のように私には見えるのだった。

ある朝——その頃私は甲の友達から乙の友達へという風に友達の下宿を転々として暮していたのだが——友達が学校へ出てしまったあとの空虚な空気のなかにぼつねんと一人取残された。私はまた其処から彷徨い出なければならなかった。何か私を追いたてる。そして街から街へ、先に云ったような裏通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立留ったり、乾物屋の乾蝦や棒鱈や湯葉を眺めたり、とうとう私は二条の方へ寺町を下り、其処の果物屋で足を留めた。此処でちよつとその果物屋を紹介したいのだが、その果物屋は私の知っていた範囲で最も好きな店であった。其処は決して立派な店ではなかったのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。果物はかなり勾配の急な台の上に並べてあって、その台というのも古びた黒い漆塗りの板だったように思える。何か華やかな美しい音楽の快速調の流れが、見る人を石に化したというゴルゴンの鬼面——的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴォリウムに凝り固まったという風に果物は並んでいる。青物もやはり奥へゆけばゆく程堆高く積まれている。——實際あそこの人参葉の美しさなどは素晴しかった。それから水に漬けてある豆だとか慈姑だとか。

また其処の家の美しいのは夜だった。寺町通は一体に賑かな通りで——と云って感じは東京や大阪よりはずっと澄んでいるが——飾窓の光がおびただしく街路へ流れ出ている。それがどうした訳かその店頭の周囲だけが妙に暗いのだ。もともと片方は暗い二条通に接している街角になっているので、暗いのは当然であつたが、その隣家が寺町通にある家にも拘らず暗かつたのが瞭然しない。然しその家が暗くなかつたら、あんなにも私を誘惑するには至らなかつたと思う。もう一つはその家の打ち出した廂ひさしなのだが、その廂が眼深に冠つた帽子の廂のように——これは形容というよりも、「おや、あそここの店は帽子の廂をやけに下けているぞ」と思わせる程なので、廂の上はこれも真暗なのだ。そう周囲が真暗なため、店頭みせに点けられた幾つもの電燈が驟雨しゅううのように浴せかける絢爛けんらんは、周囲の何者にも奪われることなく、肆はしにも美しい眺めが照し出されていくのだ。裸の電燈が細長い螺旋棒らせんぼうをきりきり眼の中へ刺し込んで来る往来に立って、また近所にある鎚屋かきやの二階の硝子窓をすかして眺めたこの果物店の眺め程、その時どきの私を興がらせたものは寺町の中でも稀まれだった。

その日私は何時いつになくその店で買物をした。というのはその店には珍らしい檸檬れんごが出ていたのだ。檸檬れんごなど極くありふれている。がその店というのも見すばらしくはないまでもただあたりまえの八百屋やちやに過ぎなかつたので、それまであまり見かけたことはなかつた。一体私はあの檸檬れんごが好きだ。レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたようなあの単純な色も、それからあの丈たけの詰つた紡錘形の恰好も。——結局私はそれの一つだけ買うことにした。それから私は何処どこへどう歩いたのだらう。私は長い間街を歩いていて、始終私の心を圧えつけていた不吉な塊がそれを握つた瞬間からいくら弛ゆるんで来たとみえて、私は街の上で非常に幸福であつた。あんな

なに執拗^{しつと}かつた憂鬱^{うゑふ}が、そんなものの一顆^かで紛らされる——或いは不審なことが、逆説的な本當であつた。それにしても心という奴は何という不可思議な奴だろう。

その檸檬^{れんどう}の冷たさはたとえようもなくよかつた。その頃私は肺尖を悪くしていつも身体に熱が出た。事実友達の誰彼に私の熱を見せびらかす為に手の握り合いなどをしてみるのだが、私の掌が誰のよりも熱かつた。その熱い故だつたのだろう、握っている掌から身内に浸み透^{とお}つてゆくようなその冷たさは快いものだつた。

私は何度も何度もその果実を鼻に持つて行つては嗅^かいでみた。その産地だというカリフォルニアが想像に上つて来る。漢文で習つた「売柑^{かん}者之言^{のこ}」の中に書いてあつた「鼻を撲^うつ」という言葉が断れぎれに浮んで来る。そしてふかふかと胸一杯に匂やかな空氣を吸込めば、ついぞ胸一杯に呼吸したことのない私^{わたくし}の身体や顔には温い血のほとばしりが昇つて来て何だか身内に元氣が目覺めて来たのだつた。……

實際あんな単純な冷覺や觸覺や嗅覺^{きゆうかく}や視覺が、ずっと昔からこればかり探していたのだと云いたくなつた程私にしっくりしたなんて私は不思議に思える——それがあの頃のことなんだから。

私はもう往來を軽やかな昂奮^{かうふん}に弾^はんで、一種誇りかな氣持さえ感じながら、美的装束をして街を闊歩^{くわふ}した詩人のことなど思い浮べては歩いてゐた。汚れた手拭の上へ載せてみたりマントの上へあてがつてみたりして色の反映を量つたり、またこんなことを思つたり、

——つまりはこの重さなんだな。——

その重さこそ常づね私が尋ねあぐんでいたもので、疑いもなくこの重さは總ての善いもの總ての美しいものを重量に換算してきた重さであるとか、思いあがつた諸^{しよ}諸^{しよ}心^{しん}からそんな馬鹿げたこ

とを考えて見たり——何がさて私は幸福だったのだ。

何処をどう歩いたのだろう、私が最後に立ったのは丸善の前だった。平常あんなに避けていた丸善がその時の私には易やすと入れるように思えた。

「今日は一つ入って見てやろう」そして私はずかずか入って行った。

然しどうしたことだろう、私の心を充していた幸福な感情は段々逃げて行った。香水の壇にも煙管にも私の心はのしかかつてはゆかなかった。憂鬱が立て罩めて来る、私は歩き廻った疲労が出て来たのだと思った。私は画本の棚の前へ行って見た。画集の重たいのを取り出すのさえ常を増して力が要るな！と思った。然し私は一冊ずつ抜き出しては見る、そして開けては見るのだが、克明にはぐってゆく気持は更に湧いて来ない。然も呪われたことにはまた次の一冊を引き出して来る。それも同じことだ。それでいて一度バラバラとやって見なくては気が済まないのだ。

それ以上は堪らなくなつて其処へ置いてしまふ。以前の位置へ戻すことさえ出来ない。私は幾度もそれを繰返した。とうとうおしまいには日頃から大好きだったアングルの橙色の重い本まで尚一層の堪え難さのために置いてしまった。——何という呪われたことだ。手の筋肉に疲労が残っている。私は憂鬱になつてしまつて、自分が抜いたまま積み重ねた本の群を眺めていた。

以前にはあんなに私をひきつけた画本がどうしたことだろう。一枚一枚に眼を晒し終つて後、さてあまりに尋常な周囲を見廻すときのあの変にそぐわない気持を、私は以前には好んで味っていたものであった。……

「あ、そうだそうだ」その時私は袂の中の檸檬を憶い出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試して見たら。「そうだ」

檸檬

檸檬

樽

私にまた先程の軽やかな昂奮が帰って来た。私は手当り次第に積みあげ、また慌しく潰し、また慌しく築きあげた。新しく引き抜いてつけ加えたり、取去ったりした。奇怪な幻想的な城が、その度に赤くなったり青くなったりした。やっとそれは出来上った。そして軽く跳りあがる心を制しながら、その城壁の頂きに恐る恐る樽を据えつけた。そしてそれは上出来だった。

見わたすと、その樽の色彩はガチャガチャした色の諧調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまつて、カーンと冴えかえていた。私は埃っぽい丸善の中の空気が、その樽の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。

不意に第二のアイデアが起った。その奇妙なくらみは寧ろ私をぎよつとさせた。

——それをそのままにしておいて私は、何喰わぬ顔をして外へ出る。——

樽

私は変にくすぐったい気持がした。「出て行こうかなあ。そうだ出て行こう」そして私はすたすた出て行つた。

変にくすぐったい気持が街の上の私を微笑ませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだつたらどんなに面白いだろう。

私はこの想像を熱心に追求した。「そうしたらあの気詰りな丸善も粉葉みじんだろう」そして私は活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩っている京極を下って行つた。

——一九二四年十月——

城のある町にて

ある午後

「高いとこの眺めは、アアッ（と咳をして）また格段でござすな」

片手に洋傘、片手に扇子と日本手拭を持つている。頭が奇麗に禿げていて、カンカン帽子を冠っているのが、まるで栓をはめたように見える。——そんな老人が朗らかにそう云い捨てたまま峻の脇を歩いて行つた。云つておいて此方を振り向くでもなく、眼はやはり遠い眺望へ向けたままで、さもやれやれと云つた風に石垣のはなのベンチへ腰をかけた。——

町を外れてまだ二里程の間は平坦な緑。I 湾の濃い藍が、そのの彼方に拡っている。裾のぼやけた、そして全体もあまりかつきりしない入道雲が水平線の上に静かに蟠っている。——

「ああ、そうですねあ」少し間誤つきながらそう答えた時の自分の声の後味がまだ喉や耳のあたりに残っているような気がされて、その時の自分と今の自分とが変にそぐわなかった。なんの拘りもしらないようなその老人に対する好意が頬に刻まれたまま、峻はまた先程の静かな展望のなかへ吸い込まれて行つた。——風がすこし吹いて、午後であつた。

一つには、可愛い盛りで死なせた妹のことを落ちついて考えて見たいという若者めいた感慨から、峻はまだ五七日を出ない頃の家を出てこの地の姉の家へやって来た。

ぼんやりしていて、それが他所の子の泣声だと気がつくまで、死んだ妹の声の氣持がしていた。

「誰だ。暑いのに泣かせたりなんぞして」

そんなことまで思っている。

彼女がごと切れた時よりも、火葬場での時よりも、変った土地へ来てするこんな経験の方に「失った」という思いは強く刻まれた。

「たくさんの虫が、一匹の死にかけている虫の周囲に集って、悲しんだり泣いたりしている」と友人に書いたような、彼女の死の前後の苦しい経験がやっと薄い面紗のあちらに感ぜられるようになったのもこの土地へ来てからであった。そしてその思いにも落ちつき、新しい周囲にも心が馴染んで来るに随って、峻には珍らしく静かな心持がやって来るようになった。いつも都会に住み慣れ、殊に最近には心の休む隙もなかった後で、彼はなおさらこの静けさの中で恭うやしくなつた。道を歩くのにも出来るだけ疲れないように心掛ける。棘一つ立てないようにしよう。指一本詰めないようにしよう。ほんの些細なことがその日の幸福を左右する。——迷信に近い程そんなことが思われた。そして早の多かつた夏にも雨が一度来、二度来、それがあがる度毎に稍々秋めいたものが肌に触れるように氣候もなつて来た。

そうした心の静けさとかすかな秋の先駆は、彼を部屋の中の書物や妄想にひきとめてはおかなかった。草や虫や雲や風景を眼の前へ据えて、秘かに抑えて来た心を燃えさせる、——ただそのことだけが仕甲斐のあることのように峻には思えた。